

和名抄の蛇・片尾について

岡 田 希 雄

一

蛇を意味する國語としては、クチナハと云ふのがヘミと共に和名抄に見えて居り、今では口語としては一般であるらしいが、是れは譬喩語であるから、二次的な名稱であつて、ヘビの方が語原は不明であるにしても、本質的名稱であると考へられる。其のヘビは佛足石歌や、本草和名・和名抄の古へは閉美・倍美であつた。本邦産唯一の毒蛇をハミと云ふのもヘミと同じ語であり、音の變化とゞも意義が分れたか、又は更に古い語形があつて、其れよりヘミ・ハミの二語が分岐したかの何れかであらう。ハミ蝮は修飾語を取りてクチバミ・タチバミとも成り、京阪方言としてはハメと成つて居るが、一方ウハバミ動植名彙所
引新讀集蟒蛇と云ふ語もある。ウハはオホ大の義であらうか。

ヘミはハムとも云はれた事があるらしい。延喜式神名帳所見河内國澁川郡に座す

は蛇草と云ふ村名（平氏太子傳曆の守屋誅伐の條に見ゆ。ハムクサと古く呼んだか。今は中河内郡に北ハグサ南ハグサとして存する）を生んだが

波彌神社（近江國伊香郡鎮座今所在不明ならん）

波彌神社（丹後國丹波郡今の鎮座不明ならん）

と共に蛇類信仰俗を示すものであらう。其のハムは又海蛇とも異稱せられる鱧ハモの名稱と同じであらう。新撰字鏡・本草和名・和名抄らの波牟・波無は一部方言を除いてはハモ（頓阿草庵集魚名十歌天文十七年の進歩色葉集）とも成つた。ハモの語原を海鱧二字の唐音語に求める説が、貝原篤信日本釋名、同大和本草、僞書和訓精要抄、和漢三才圖會などに存するが附會である。白石東雅七五の説に従ふべきである。

へミ・へビの關係と同じであるのはハム・ハブの關係である。國語の一方言たる琉球語のハブは飯匙倩と書かれて居り、まるで字音語のやうであるが、ハム・ハモと海鱧の字面との關係と同じであらう。葉の搾汁が蜂や蛇の毒を消すに効あるハブサウはハメサウとも呼ばれる。此のハブはハミの方に關係があらう。

へミ・ハミの語原は判らない。「物を取食ハム虫なればいへり」と云ふ黒川春村神名帳考證土代附考の説伴信友全集本六四五頁や蝮の支那に於ける異名反鼻から出て居るとの説（和名抄所見、これを襲うたものに塵袋卷四、重訂本草綱目啓蒙卷三十九、漢吳音徵第二十二轉など）があるが信せられない。「匍匐（はふ）と

云ふ語との關係を説く説を何かで見たと思ふが是れは面白い。但し古語拾遺が神劍天十握劍の名稱天羽々斬を説明して古語大蛇謂之羽々言斬蛇也」と云つてやうに、ハハ・ハバと云ふた時代もあることを思ふと、やはり語原考察は難しいと云はねばならぬ。朝鮮では蛇の字音語の他に Pa-yan Pa-yan-mi Pa-yan と云ふのがあり、又あつたが、色眼鏡で見ると何だか關係がありさうにも見える。

二

さて其のハミは、云ふまでも無く本土産（本州・四國・九州を云ふ）の唯一の毒蛇で灰褐色の錢型斑紋と胎生とが特色である。

クチバミ 塵袋四ノ二一ウ（易林本節用集クチバミ永祿二年本五年本は然らず）

ノヅチ 名義抄一〇ノ一〇ウ五

ハメ 京阪方言

マムシ

タチヒ 古事記 仁徳條

タチバミ

などとも云ふ。クチバミについて塵袋は咬まれると毒氣入りて腐爛するからとして居るが何うであらうか。蛇のクチナハのこそ朽繩であらうが、クチバミは口腹にして其の人を襲うて咬みつく點に基く

名稱であると思ふ。ノヅチのノは野であり、ツチはミヅチ・イカヅチ(八種のイカヅチ神)などのツチであらうと思ふ。

ハメはハミの轉でミミズ・メメズ、オホカミ・オホカメ式の類である。マムシは眞蟲にして、狼(大神)を眞神と云ひ、鷲を眞鳥と云ふのと同じ類で、日本では人に與へる危害が最大である虫なればである。因みに漢字の虫字は蝮の象形文字である

蝮を古語でタヂヒと云つて居たことは、紀に多遲比瑞齒別天皇とある反正天皇を、記では蝮之水齒別命と書き、又蝮部を丹比部タヂヒベとも書いた事 民部式から窺はれるが、ハミとの發生的前後や語原は判らない。宣長はマムシをタチバミとも云ふのと關係あらうかと云つて居る。傳二一五頁 龍タツと關係あらうか。

三

ところで其蝮のことを支那では反鼻と云つた。是れは和名抄八ノ五に

蝮 本草疏云蝮蛇蝮音一名蟻蝮僕連兼名苑云一名反鼻

とあることにより知られるのであるが、増廣本草綱目卷四十三ハツ所引の諸説を見ると「鼻反・口長」「尖口」「口尖」と云ふ點が特長であるために名づけられたものである。しかして鼻反と云ふことは本草の附圖を見れば判る通り、畫龍の上吻の如くに上吻が長うて上方に反つて居るのを云ふのである。所で本邦の蝮は鼻や口に特長は全く無い。蛇にしてもさうである。たゞ臺灣の毒蛇の中で最も恐るべ

キヒヤツボダ (百步蛇 *Aniistrodon acutus* と云ふのが吻端著しく狭長で稍上方に向ひ、丁度スツボン (鼈) の口の如くである。思ふに支那の反鼻は此の百步蛇の類のものであるらしい。反鼻の身長や色・斑紋などは本邦のハミと大體同じであるが、ハミよりも猛毒であるらしいから、此の點でもハミと異るらしい。して見ると支那の蝮・反鼻と本邦のハミ・マムシとは動物學的には決して同じものでは無いと信せられる。

四

此の反鼻はこれを何と發音すべきであらうか。現在の音で云へば反字は舌内 n 尾音ハンであるから、むろん反鼻はハンビ (*Han-bi* 但し實は *Hambi* である) と云ふ撥音語であるとする他は無いが、慶長板倭玉篇にさへん・ハン・ホン (九^上四^オ) の三音があるから、和名抄時代の古音に成ると、輕々しくは云へない。例を平安朝末壽永書寫の前田侯爵家藏三卷本色葉字類抄や、製作年代不詳の類聚名義抄其の他に取つて見ても

反魂香

ハムコムカウ

反畔

ヘンホ

(色葉字類抄)

霸多

反多 (和名抄遠江龜玉郡郷名、今濱名郡小野田村半田)

殖生

反布 (同駿河安倍郡郷名)

の如きアを體韻とするものもあるが又

反 非遠反 禾ヘン ホン(禾は和音の義
名義抄九ノ二六オ七)

反損 ヘンソソ 反難 ヘンナン(色葉字
類抄)

反閉 ヘンバイ(字類抄は反
を返に作る)

反吐 ヘド(和名抄に嘔吐を倍土都久と訓み、竹取物語にも見
ゆ、反吐の文字は皇極紀入鹿誅殺の條に見ゆ)

の如くエを體韻とするものもあり、更に又和名抄五ノ二
三ウニに「反故」とあるものは訓註は無いが

源氏物語橋姫・浮舟 ほぐ

紫式部日記 ほぐ

源俊賴散木集 秋の田のほぐとも雁の見ゆるかな誰れ大空に書き散らすらむ

前田家三卷本字類抄雜物條 反故ホク俗
ホンコ

類聚名義抄九ノ二
六オ七 反古ホク 反故同 反非遠反 禾ヘン ホン

日本靈異記(本垢箋註和名
抄所引)

などの例から、ホング又はホグにして、反字にホンと云ふオを體韻とする音が存した事も考へられ
る。要するに和名抄時代の反字の音は韻尾や子音の眞の音價はさておき、體韻だけを問題とするにし
てもホン・ハン・ヘンの三種の韻(但し合口音である)の存した事が想像できる(萬葉假名としては記
紀萬葉集には假字として假用して居る例が無い)。

而して鼻は濁音文字であるのは和名抄當時(註 2)とも同じことであつたらう(石塚龍麿によると、紀・萬葉で鼻は濁音假名として使用せられて居る)。従うて反鼻は和名抄當時はハンビ・ホンビ・ヘンビの兩様に讀んで居たと見られる。しかして反が韻鏡二十二轉合阮韻にして、府遠切唐韻甫遠切集韻非遠反名義抄などあるのを見ると、韻はエン Wen と云ふのが原則にて、つまりヘンであつたと見られる。

がこゝに考へねばならない事は、和名抄當時の m n 尾音が撥音であつたと云ふ積極的明證が無く、其れを明らかにするものも一仕事である現在では、開音節的な音であつたかも知れないと云ふ不安がある。故にハニ・ハヌ、ヘニ・ヘヌ、ホニ・ホヌ と云ふやうな音であつたかも知れぬと云ふ事をも考慮に入れなければならぬ。さうすると云ふと反鼻はハンビ・ハヌビ・ホンビ・ホヌビ・ヘニビ・ヘヌビと云ふやうな語であつたことを理論上考へてもよい。

更に又反字が開音節で無く閉音節であつたにせよ

紫苑 和名抄廣本之乎邇、古今集物名など

木欒子 無久禮邇之乃岐

木蘭 毛久良邇

の例の如くにヘニビ・ハニビ・ホニビであつたのでは無いかとも考へられる。更に又反鼻は其の撥音尾が除かれてヘビ又はハビであつたのでは無いかとも考へて見なければならぬ。丁度

反故 ホケ問答 モダフ汗衫 カザミ本意 ホイ便無し ビナシ南殿 ナデン

など、同じ現象であると見るのである。(但しこれらは主として和文類に現はれた有職訓み式の例であつて、現在では非撥音語であるが、平安朝時代に於いても實際の音價が果して非撥音的であつたものか何うかは少數の例を除いては、明確なことは判らないと云ふ他は無いものである。われ／＼の知つて居る範圍の此の種の有職訓みの語には撥音上の明證の無いものが多いらしい。)要するに反鼻の和名抄時代の撥音については

(一)ヘンビ・ハンビ・ホンビと云ふ撥音語であつたと見ること

(二)ヘニビ・ヘヌビ・ハニビ・ハヌビ・ホニビ・ホヌビと云ふ風な非撥音語であつたと見ること(但しこの解釋には二つの異つた立場がある)

(三)ヘビ・ハビ・ホビの如きものであつたと見ること

が先づ可能である譯である。

五

ところが又一方我が國にも「片尾」と云ふ語が存した。和名抄にはじめて見えて居るものであるが、

これはハミ即ち蝮のことでは無くて、ヘミ即ち蛇の事であつた。しかし其の發音は明らかで無い。今日の音を以て律するとヘンビとしか讀めないものであるが、例により和名抄時代の古音を考へると、片字には

片 遍音（新撰字鏡一〇ノ二九ウ四）

片々ヘン、 片雲ヘンウン 片言ヘンケン（前田家
字類抄）

片 普扁反 禾ヘン（名義抄四ノ三ウ八）

と云ふ風にヘンと云ふ音がある。蔽韻、匹見切、偏ノ去聲であるから體韻は先づエである。

一方また翰韻でもあるから、ハンの音も存した筈である（萬葉假名としては記・紀・萬葉に片字を見ない）。しかしして尾は漢音としてはビ、吳音としてはミであらうから、従うて片尾の音を今日の音で律する時は、音價は至極明瞭で何の疑ひも無いわけであるが、和名抄時代の音を考へると反鼻の場合と全く同じであつて

(一)ヘンビ・ハンビ

(二)ヘニビ・ヘヌビ・ハニビ・ハヌビ（但し此の解釋には二種の立場がある）

(三)ヘビ・ハビ

(四)右のビをミとした場合

の何れかであつたらうと考へる他は無い。(和名抄の燕尾は字類抄でエンビである)

六

要するに、反鼻も片尾も兩方とも、和名抄時代の發音は一見明白であるかの如くであり乍ら、實は容易に想像はできないのである。しかしわれ／＼が一寸見てさへ反鼻と片尾とでは撥音上の類似又は同一を、何となしに考へたくなるものである。しかして著者の順も亦やはりさうであつたと見られる。即ち彼れは

兼名苑云一名反鼻蝮、波美、俗或呼地爲反鼻其音片尾

と記して居る。此の注文の意味は「蝮の國語は波美即ちハミである、ところが世俗の間には蛇即ち倍美のことを反鼻と呼んで居る、但し其の撥音は片尾である」と云ふのである。これを云ひかへると、順の當時、世俗のあるものはヘミを片尾と呼んで居た、其れは支那で蝮を反鼻と云ふので其の反鼻と云ふ名稱を誤つて蛇に當て、居たのである、と云ふことに成る。

更に字音のことだけについて云ひかへると、人々は反鼻のつもりで撥音してゐるのであるが、事實は片尾ときこえると云ふのである。

これから察すると順の當時、反鼻と片尾とでは近い音であり乍らも、ある程度までの相異の存したことは事實である。しかして其の相異と云ふと何う云ふものであつたかは判らぬが、ハンビ(反鼻)と

ヘンビ(片尾)との相異であるならば、われ／＼でさへ直ぐ相異を氣づくであらう。若し又兩方の體韻は同じであつても、更にヘビ・ヘンビ、ヘビ・ヘニビと云ふ風な相異、又はミとビとの相異であるならば、これも亦誰しも音の相異に氣づき得ることである。

果して反鼻と片尾との相異は何の程度のものであつたらうか。觀察點を變へて再び片尾の音を考へて見る。

七

順の當時にヘミを片尾と聞える音で呼ぶ人もあつた。しかして順は片尾は反鼻から出たと解した。此の解釋の當否は暫く置くが、とにかく倍美を片尾と呼ぶ人が一部に存した。倍美と片尾とでは撥音の異なることは、此の順の書き方で極めて明らかである。しかして彼れは倍美が反鼻から出て典據ある語であることを認めんとするものゝ如くであり乍らも、倍美の方を正しい語と認め、片尾の方は世俗の人の或る一部分の人の語、換言すれば蛇を示す語としては倍美よりも勢力の劣るものである、と見なして居ることは明らかである。

倍美と片尾との間にはさう云ふ關係即ち相異がある。しかして順は

錢(世邇)

木蘭(毛久良邇)

木榮子(無久禮邇之乃岐)

等の如き標記法をも知つて居るのである。其れだけに片尾の場合にはヘニビ・ハニビと云ふ式の標記を採用して居ないので見ると、片尾は恐らくはヘニビ・ハニビでは無かつたのだらう。然らばヘビ・ハビ式の音であつたかと云ふに、ヘビならば倍美の式にならひ、倍尾とでも書きさうなのに、さうせないのを見ると、ヘビであつたとも見られないやうだ。倍の假名では示せない或種の音を片字が示して居るのであると見なければならぬである。さう考へて來ると片が支那音として元來撥音のものなることを考へ併せると、この片尾の場合の片も亦ヘニ、ヘヌにもあらず、又へにもあざるヘンと云ふ撥音を示すものであると見る他はあるまいことに成る。片の體韻をアと見る場合には片尾はハンビ・ハンミと云ふ音を示すことに成るが、韻鏡の圖面上からは、片の音はヘンが普通であつたと考へられるから、是れも今は除外してよいと思ふ。

ところで倍美は

閉美

(佛足石歌)

チリスギズベミ
落過沼蛇 (萬葉集卷十)

倍美以知古

倍美乃毛奴介

波美 (本草和名)

倍美

加良須倍美

邇之岐倍美

波美

倍美乃毛沼介 (和名抄)

ヘミ

ヘミノモヌケ

ハミ (前田家字類抄)

カラスヘミ一〇ノハウ一

ヘミ一八ウ五

ハミ一ニウ五 (類聚名義抄)

とあるやうにヘミであつた筈である（美は萬葉假名としては吳音によりミであり、ビでは無い）。しかしヘミはセミ・セビ（蟬）トミ・トビ（鳶）のやうにヘビとも成りやすいのであるから、順の當時にヘビと云ふ語も存したと見ることも出来る。和名抄などには出て居ないが、それはヘミに比してヘビの語の勢力が劣つて居るとか、又は語の雅俗意識から意識的に除かれ採用せられなかつたとも考へられるから、和名抄などにヘビが出て居なくても當時ヘビの語が一部で存せなかつたとは斷言できまい。

さてヘビと云ふ語があるとすると、ヘンビと撥音化することも考へられる。丁度今のトビ・トンビ（鳶）ハベル・ハンベル（侍）と同じである。和名抄の當時ヘビの語が全く無かつたと見て、尾は吳音としてミの假名であると見るならば、ヘミが、アマリ・アンマリの例と同じやうに、ヘンミと成つたとも見られるし（尾字は萬葉集では特長ある十三音の一つとしてミの假名である）又、ヘミが撥音化したゝめにヘンビと成つたのであるとも見られる。

さて斯う云ふ解釋が可能であるから、片尾はヘンビ又はヘンミであつて、ヘミ・ヘビが撥音化したものであると見る他あるまい。しかして片尾は偶然にも反鼻の音（其の正しい音は判らぬが、順當時の日本音としてはヘンビ又は其れに近い音であつたらうと思ふ）と近似して居るので、順は其の語原解釋意識を働かせ、又は何でも漢字に出典を求めたがる儒者心理から、反鼻と片尾とを結びつけたものであつて、反鼻の音も片尾に近い撥音語であつたと解すべきであると思ふ。しかして現に後の文献

にはまさしくヘンビ（ヘンミでは無い）として現はれて居るのである。例へば和名抄の成立を去ること約二百年の後の保延二年三月に、源實俊により書寫せられた法華經單字（其の成立は不明である）には

蛭ヘンビ カラス クチナワ 蛇ヘンビ クチナワ 蝮クチヘミ（三七）

と云ふ風にあり、又保延より後ること九年ほどの、天養中より書き出して治承中に完成し、壽永に書寫せられた前田侯爵家の三卷本色葉字類抄への條には

蝮フクハミ蝮ヘンビ一名反鼻或呼蛇（これは和名抄）
呼蛇爲反鼻其音ヘンビ（に據りしもの）

と見え又類聚名義抄に

反鼻蝮一名也 或呼蛇 爲也ヘンビ（二ノ四・ウハ） 指聲符あり

とあり、又弘安頃の塵袋卷四ニウにも反鼻・片尾兩方ともにヘンヒと讀んで居るのである。斯くの如くに平安朝末にはまさしくヘンビと云ふ語が存し、且つ和名抄の反鼻や片尾をヘンビと云ふ風に撥音語として讀んで居た事實が存するのであるから、二百年前の和名抄の片尾も、ヘンビ（ヘンミで無い）と云ふ撥音語であつたと見る事は有力な傍證を有するのであると思ふ。箋註和名抄の著者も亦、反鼻・片尾の撥音には全く觸れないとはいへ「俗呼_レ蛇爲_二片尾_一者即倍美之轉、源君以爲_二反鼻字音_一者屬_二牽強_一」と云つて居る。

要するに和名抄の片尾は撥音語ヘンビであつた、反鼻も亦其れに似た撥音語であつたらう。但し無
牟で撥音を標記する事を知つて居る和名抄に倍無尾と云ふ風に書いてない理由は判らぬ。更に又片尾
がヘビから出た撥音語である以上は其の音は唇音ビに影響せられて Hēmbi である——Hēmbi では無
い——べきであるから唇内 m 尾の文字で寫すのが至當であるに、さも無くて n 尾の片字で寫されて居
るのを見ると、m 尾 n 尾の字音は、本來は大きな相異なるものであるとは云へ、和名抄の當時は撥音
なるが爲め概して混同せられるがちであつたらしい事を考へねばならない。

八

さて順が、反鼻は片尾と云ふ風に聞えると云つて居ることにつきて、反鼻片尾の音的相異を考察す
るに、ハンビ・ヘンビと云ふ風な體韻の相異なる点と見るならば、解釋は全く何でも無いのだが、然
うは見ないで、同じヘンビと云ふ音に於ける相異なる点とすると、其の相異は微妙な或る種の相異で
あつたと見るほかは無い。

今日では反・片、鼻・尾何ら發音上の區別が無いが、名義抄に於いても

片 禾ヘン

反 禾ヘン、ホソ

尾 禾ヒ（ヒの右肩に∨の符號あり）

鼻 禾ヒ (同右)

と云ふ風に全く同じであるが、これは和音、即ち國語聲音化した通用音であるからの事であつて、和音ならざる音や、支那の原音

註 支那の原音と、今私が「和音ならざる音」と云つて居るものとは、一致することも有つたらしいが、又かなりの相異のあつたことをも考へねばならぬ

との間には明らかな相異が存した筈である。即ち反と片との間では

反 外轉第二十二、合、上聲、阮韻、第三等輕唇音、非母、清音

片 外轉第二十三、開、去聲、霰韻、第四等重唇音、滂母、次清音

と云ふ相異がある。三十六字母や二百六韻の音價、又等位などについては、學者により様々な解釋があり一定せないが、大體を云へば非母はf、滂母はphであるから(二等と四等とは母韻が異なる)

反 フヘン fwen

片 ブフエン phen

である。(カールグレンの復原音は Analytic Dictionary of Chinese And Sino-Japanese 片は二二五頁 反は四〇頁 照)

又鼻・尾は

鼻 内轉第六、開、去聲至韻第四等、重唇音、並母、濁音

尾 内轉第十、合、上聲尾韻第三等、輕唇音、微母、清濁音

であるから

鼻 ㄋ

尾 mwi

である（カール・グレンの音は、鼻二二〇頁、尾一九二頁参照）。

斯う云ふ譯であるから、とにかく反鼻と片尾とでは支那の原音に於いてかなりの相異があるから、順は此の相異を認めて、あゝ云ふ風に反鼻が片尾と聞えると云つたのではあるまいか。漢字音は今日では全く國語聲音化して居るが、しかし古代に溯れば溯る程、字音の國語聲音化の程度は少いものであることは云ふまでも無い。

しかして順の當時、何の程度に國語聲音化して居たかは絶対に判らぬが、今日と比較すれば宵壤の差が存したと思ふ。名義抄の和音なるものでさへも、われ／＼の理解出來ぬ符號（前記の尾鼻に存する）が存して、今日の字音とかなり相異せるものある事を想像させる程であるから、順の當時の音は更に國語聲音化の程度は少かつたであらう。順が

瑠璃 流離二音俗。云留利

紙燭 俗音之曾玖

琥珀 虎伯二音俗音久波久

喉痺 侯婢二音俗詛云古比

帳 猪高反此間音長（六ノ六五オ）

斗 當口反俗音度（六ノ二四オ）

錠 都回反此間音都以（四ノ四八ウ）

慈石 此間云之蛇久

壇 達丹反俗云本音之濁（三ノ三四オ）

錠 大日經疏云……音古俗云平聲之輕

菊 舉竹反……俗云本音之重（一〇ノ三オ）

など、書いて居るのは、眞の聲音的意義を知ることとは出来なくとも、とにかく當時では支那の原音又は其れに近い音と通行の和音とが存したこと、且つ儒者として字音の智識に詳しかつた筈の順が、字音の方に關しては一般人以上に注意深くあつたことを認めることできる。

しからは順が反鼻片尾の相異を問題にして居ることも、單なる體韻の相異であるとは見ずに、微妙な相異を注意して居るのであると見る可きであらう。かくて私は

要するに和名抄の片尾は、ヘンミでは無く、ヘンビと云ふ撥音語である、ヘミが撥音語化してヘンビと成つたのである。其のヘンビを示すに、片尾の二字を使用して居ることから、當時字音ⁿ尾の片の音價は決して開音節のヘニ・ヘヌでは無くて、ヘンであつたと見る可きである、反鼻も撥音ヘンビであらう。順が反鼻、片尾の音的相異を注意して居るのは、當時は兩者の間に音的相異の存したからである

と考へる。(昭和七年四月一日稿)

(註1) 蛇の語源の事は、後に新村博士の東亞語原志の「南北に系統を引く日本語」に御説のあるのを知つた。しかし自分の記憶にあるのは、博士の他の書であつたらしい。

(註2) 和名抄に「玉門通鼻」の例がある。



「歴史と國文學」第七卷 第二號

八月號

目次

- 和名抄の蛇・片尾について……………岡田希雄（五）
- 讀本に現れたる勸懲主義……………原田芳起（九）